

小麦「ゆめちから」 いいもの穫るなら穂肥が重要

しょうゆ用やパン用品種「ゆめちから」は、子実に含まれるタンパク質の割合が重要とされ、しょうゆ用では13.5%を目標としている。10a当たり追肥窒素を穂肥6kg、実肥3kg施用することで収量500kg、タンパク質含有率13.5%を達成し、穂肥と実肥の併用効果が高いことが分かった。

内容

本試験は、県立農林水産技術総合センター内（加西市）のほ場において、「ゆめちから」を供試し、2009～2011年（播種年）の3か年実施した。

播種は11月上旬に播種量6.5g/m²、条播し、1区9m²の2反復とした。施肥方法は、10a当たり窒素成分で、基肥6kg、分けつ肥（1月下旬から2月上旬）2kgを共通として、処理区として穂肥（3月上中旬）量を0kg、3kg、6kgの3段階とした。その後、全ての区に実肥（出穂10日後）として3kgを硫酸で施用した。

葉中窒素含有率は、葉中窒素測定装置（サタケ、CCN5000）を用い測定した。子実中タンパク質含有率は近赤外線分析装置（BUCHI、NIRLab N-200）で測定した。

出穂期は4月30日、成熟期は6月15日といずれ

の区も変わらなかった。

施肥試験の結果、穂数は穂肥量が多くなるほど増加し、それに伴い収量も向上した（図1）。穂肥6kg施用することにより、収量は10a当たり500kgとなった。

出穂約20日後の葉色値は、子実タンパク質含有率と正の相関関係が認められた（図2）。葉中窒素値が3.5以上で、子実タンパク質含有率は13.5%となるので、穂肥6kgと実肥3kgの施用が必要である。

普及上の注意事項

「ゆめちから」は、湿害に弱いため、施肥効果を発揮させるためには、排水対策をしっかりと行うことが重要である。

宮脇 武弘（姫路農業改良普及センター、前農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2410）

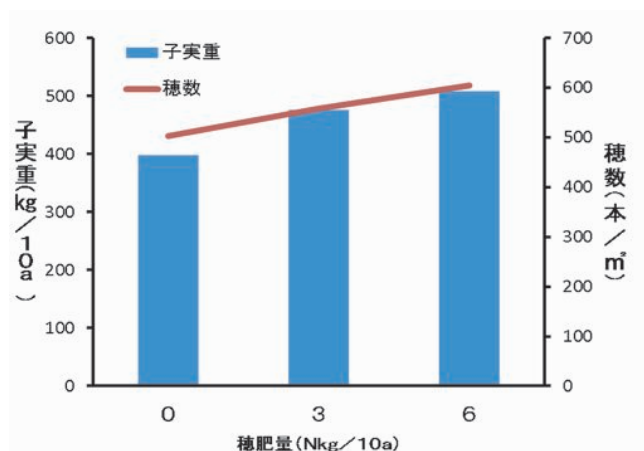


図1 穂肥施用量が穂数、子実重に及ぼす影響

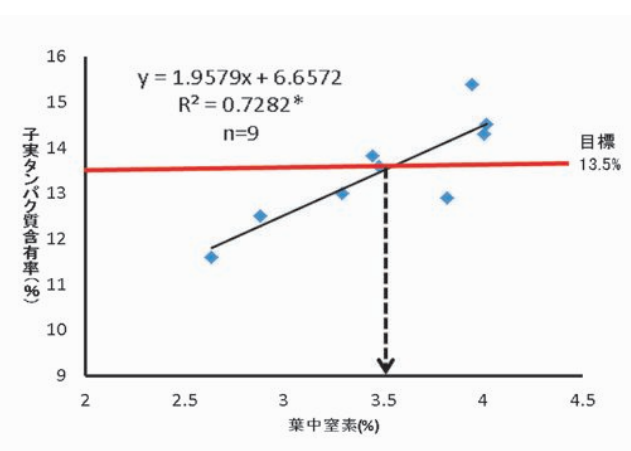


図2 出穂約20日後の葉中窒素と子実タンパク質含有率